スコウへ來て、立派な馬車で伯爵家へ立寄つた。其日午後二時迄に一家はすつかり立退の用意が出來た。暫しの宿をかりてゐた負傷兵等も車を連ねて門から出て行つた。其中で一番目立つ馬車の主をソンニャが下女に尋ねると、ボロコンスキー公爵である事がわかつた。ソンニャが、それを伯爵夫人に告げると、夫人は驚きの目を睜つて、「ナタシャは？」と聞いた。ナタシャは知らぬ樣子であるとソンニャが云ふ。伯爵夫人はソンニャを抱きよせて、何事も神の御意であると深く考へ沈んだ。そこへ、ナタシャが、母が自分の名を呼んだのを聞きつけて、「何か御用なの？――。」と出て來た。夫人は「何も別に……用意が出來たら發ちませう。」と云つて俯向いて顏を隱した。ソンニャは何も云はずナタシャを抱いて接吻した。「どうしたの？何か出來たの？」と悟りの早いナタシャは尋ねた。ソンニャは「いゝえ、何でも無いのよ。」

軈て、家族は皆集まつた。伯爵が先づ聖像に十字を切ると、一同皆之に倣うた。忘れ物など注意し合つてやがて馬車に乘つて出掛ける。ナタシャは時々馬車の窓から頭を出して、一家と共に避難する長い負傷兵の車列を見て居たが、突然「ベツコイ伯爵！」と叫んで母にピエルの居ることを知らせる。夫人は「馬鹿な事お云でない。」と取り合はない。「いゝえ、阿母さん慥かにいらつしやるんですよ。馬車を止めて……止めて。」とナタシャは叫んだが、車は構はず進んで行く。進んで行く中に、突然ピエルが現れてナタシャの馬車に聲をかけた。彼は妙な百姓のやうな服裝をして靜かに軋る馬車について來て、ナタシャに何か云ひかけようとしたが、夫人が居るので躊躇した。ナタシャが「伯爵！如何なすつたんですか？」と問ふと「何でもありません。明日……いや左樣なら……危急の時です。」と云つて馬車から離れて人道へ出

た。

ナタシヤは馬車の窓から首を出して愛情の籠つた、併し少し嘲る樣な笑を浮べて、いつ迄もいつ迄もピエルの方を見て居た。

四十八

九月十三日の夜クツゾフは全軍にモスコフよりリアザン街道に向つて退却す可き命令を與へた。

退却は非常に急いで、川を渡るにしても或隊は橋を、或隊は淺瀨を、或隊は小舟で同時に押渡ると云ふ風にして、十四日の午前十時には大部分はモスコウを離れた。此の同時刻に、ナポレオンは親兵を隨へてポクンナヤ(雀が丘)の頂に立つて、眼の前に展開された光景を見渡してゐた。見馴れぬ外國の景色を見て誰も抱く不安の念を彼も抱いた。

明らかに此町は特種の力を持つて生きて居る樣に思はれる。宛然偉大な美しい身體が呼吸して居る樣に思はれる。「嗚呼此處に……我が脚下に此國の首府は横はつて、運命を待つて居る。アレキサンダー帝は何處に居るか。予が口より出づる一言、予が手の動く一振によつて此都を破壞する事が出來る。予は眞に偉大な者であるわい！」と心密かに誇つて見たが、「併し、果して此都を手に入れる事が出來るだらうか？」といふ掛念も起つて、何となく一種の哀感を覺えた。「何も强ひて此由緒あるモスコウを亡ぼすには及ばぬ。平和に事を治むる道があれば……。」と思ふ。予は兵士等に云はうと思ふ。「兵士等よ！予は敢て戰を好む者ではない。我が願は唯人民の平和と繁榮とにある。」と。——併し兵士等の前では矢張常のやうに堂々と諭すであらう……。「進んで彼の都を占領せよ。見よ！モスコウは彼處にある！」

十四日の午後四時、ミュレー將軍麾下の佛軍はモスコウに侵入した。到る處に山なす財寶、無盡藏の富――佛軍は餓えた虎のやうに荒れ廻つて掠奪を恣にする、虐殺が行はれる、火災が起る。

モスコウの大火！佛蘭西方はそれを總督ロストフィンの野蠻な行爲に歸し、露西亞方は佛兵の蠻行に歸した。併しそれを一人又は一團體の罪に歸するのは勿論誤つて居る。

モスコウのやうに木で造られた町は既に燒ける素質を供へて居る、此場合燒ける方が至當なのだ。住民が避難する時鉋屑の上へ燃えて居る石炭を落した事もあらう。而してそれが燃え上つたであらう。總て木造の町は注意に注意を加へて居ても火事が絶えない。平時に軍隊が宿舍した場合などにも、得て火事は起り度がるものだ。

要するにモスコウの大火の直接原因は、所有主が居ず、無責任な敵に占領されたと云ふにあるので、別にむづかしい策略があつたのではない。

四十八

ピエルは邸を立退いた後別に行く處とて無いので共濟組合の長老であつた故バズデエフの邸に寄寓した。此處にはゲラシムと云ふ下僕と故バズデエフの弟で酒精中毒で半馬鹿になつて居るマカーと云ふ男が居た。彼はゲラシムに「お前に賴んどくが、私の身分を他に云つてはならんよ、其から――。」「何か召食りますか。」「いや別に食物はいらん。」と顏を赤くして「短銃と野良着が要るのだが――。」と云ふ。短銃は無かつたがゲラシムは野良着を見つけ出して持つて來た。翌日ピエルはその野良着を着て短銃を買ひに行く途中で、ロストフ家の馬車に出逢つたのであつた。

ピエルは十四日の晩もそこにゐた。淋しい中に二日を暮らして、何だか氣が變になつてすべてが夢のやうに思ひなされる。不圖思ひついて圖書室へ行つて、死んだ友人の遺した書物を讀むうちに、心が次第に落ちついて來たが、矢張ナポレオンを暗殺するのは自分の義務である樣に考へられた。全歐洲を此禍亂の中から濟はねばならぬ。此不幸の源はナポレオンだと考へるとその實行の甚だ危險な事も顧みてはゐられない、此一身は犧牲にせねばならないと考へる。

仕遂げることが出來なかつたら殺される迄だ。單身ナポレオンの傍へ襲ひよつて、突然に短銃で、いや待て、短劍の方がよいかな？まあそんな事はどちらでも——「此は自分がするのぢやない、神の手によつて汝を罰するのだ！と叫んでやらう。それからナポレオンを殺した後の事を考へて見る。「宜しい私を罰して下さい！と潔く云はう。」などと

考へ續ける。

此處へマカーが非常に醉うて這入つて來た。卓上の短銃を見付けると、手早くひつさらつて大廊下へ走り出た。皆して取戻さうとするが中々離さない。やうやく戸口迄腕を掴んで引き摺つて來た時、そこへ佛軍の士官と兵卒とが二人案内もなしにやつて來た。士官はガラシムに何か訊ねたが、要領を得ないと見え、ピエルの方へ進みよらうとする時、突然マカーが醉に任せて短銃を放つたので室内は白煙に包まれた。佛蘭西人は眞青になつて慄えた。ピエルは飛んで行つて短銃をもぎとつて、佛蘭西人に怪我はないかと訪ねた。士官は大にピエルに感謝し命の恩人であると云つて分捕品の酒や肉を取り寄せてピエルに御馳走する。ピエルも酒の勢で元氣付いて快活な士官との談話に近頃にない心の滿足を覺えた。窓から見る遠方の火事をも、格別氣にもとめ

ず唯美くしい夜であると考へて居る……

モスコウの最初の火事は九月十四日の夜であつた。其時ロストフ一家は負傷兵を伴ひ、モスコウからは餘程離れた或る村に滯在して居た。モスコウの方角に當つて漸々擴がる火の手がそこからはよく見えた。ナタシヤはソンニヤと火事を見て居るが、それは自分と何の關係のない事のやうに思はれて唯茫然として居た。ソンニヤが不注意にも負傷兵の中にアンドレエーが居ると云ふ事を語つたので、彼女は唯其の事計りを考へて居るのだ。

其夜ナタシヤは皆寢靜まるのを待つて密かに寢床を拔け出て、一足毎に注意して負傷兵の室に行つた。寢て居る負傷兵を一人毎に蠟燭の灯の朧ろな影に透かして見て、遂にアンドレエーを見出した。彼は昔

と違つて居なかつた。顏を赤くして眼を輝かして貪るやうにナタシヤを見た。ナタシヤは側へ行つて、そつと膝で坐つた。アンドレエーは笑を浮べつゝナタシヤの方へ手を擴げた。

ボロディノーの野戰病院に於ては非常に熱が高く、殆んど無意識の狀態で、醫師も到底助かる見込はないと云つたが、此村へ來てからは少し元氣になつて、新約全書が讀みたいと望む迄になつた。彼は今斯んな風に考へて居る。「幸福は愛にある。愛の中でも朋友を愛するは人間の愛で、敵を愛するは神の愛である。人間の愛は憎みに變ずる事があるが、神の愛は變ずる事はない、何物も、死と雖も、此神の愛を亡ぼす事は出來ない。」病人の常として夫から夫へととりとめもなく考へては、「自分は彼女程深く愛した者も又憎んだ者もない。」とナタシヤを心に描いて頻りに憧憬て居る處へ、思掛なく生けるナタシヤが現はれ

た。彼は別に驚きもせず、唯喜んで安心したと云ふ樣な風に溜息を吐いて手を擴げて、「あゝ嬉しい。」と云ふ。ナタシヤは其手を靜かに取つて「許して下さい。今迄の事は――。」と、聞えるか聞えぬ位に云ふ。アンドレエーは「昔よりも以上に愛して居ります。」と唯それ丈云つた。

母の命で下女が迎へに來たので、ナタシヤは寢床に歸つた。而して一人で泣いてゐた。

此から後、ナタシヤはアンドレエーの側へ來て甲斐々々しく看護した。

ピエルは十五日の朝遲く起きた。短銃は重くて大きいので、青鞘の短劍にして、それを胴衣の下へ隱して出掛けた。來て見ると實に慘憺たる有樣だ。火の中から子供を出し遲れた母親がピエルに是非助けて呉れと賴んだ。彼は猛火の中へ飛び込んだ、煙と熱とで窒息する樣だ。家の中には多勢の佛兵が盛に掠奪をやつて居る。壁や天井の燒け落ちる音、焰の燃え上る響、群集の泣き叫ぶ聲、實に物凄い限りだ。やうやく子供を見附けて腕に抱へて歸つて來ると母親は居ない。傍に居た農夫の妻に子供を預けて置いて探す。佛兵が其女を捕へてゐる。ピエルは「其女に構ふな！」と叫ぶと、一人が、お前に關係はない事だ！」と威嚇する。ピエルは大に怒つて擲り倒した。すると、多くの佛兵はピエルを取り圍んだ。ピエルは腕を縛られた丈は知つて居るが、後は夢中だ。「此奴は短劍を以て居る。」と云ふ言葉が聞えたと思つた。間もなく彼は護送された。

四十九

モスコウがかうした大動亂の時も、彼得堡では常と變らぬ生活が續けられた。十二年九月七日ボロディノーの戰の日にアンナ・パヴロヴ

ナは招待會を催した。此會の主なる目的は首府の貴顯から皇帝に奉つた手紙を讀むといふので、其手紙は皆愛國心の典型を示すものと考へられて居た。で、その讀役はヴシリで、渠は讀み手としては非常に熟練して居た。

彼得堡では今、エレンの病氣が評判になつて居た。其の病氣の原因は同時に二人の男と結婚しようとする心配からだと噂された。併しアンナの前では誰も此の噂を口に上すものは無かつた。ヴシリは讀み手の役を濟ますと熱心に露國の國勢又は戰爭の豫言について人々と論じた。アンナは明日は皇帝の誕生日故必ず捷報が來るであらうと述べたが、果して其翌日捷報に接した。併し同時に戰死者の報告もあつて喜びの中にも悲みの影が伴うた。同夜又彼得堡を驚かした悲報があつた。其はエレンの死であつた。

マリヤはニコライに別れてモスコウに着くと、甥と家庭教師とに會ひ、アンドレエーからの手紙によつてボロネズの伯母の宅へ行く事とした。

マリヤは今は新家庭を作る望みと甥の教育とで、父の病中や死後の苦勞も、ニコライに逢つてから後の心の苦しみも全く消えて了つた。

此頃ニコライは軍用で單身ボロネズに滯在して居たがマリヤの到着を聞いて早速訪ねて來た。マリヤは別に狼狽へた樣子もなく、少し頰を染め、新しい光を眼に輝かしてゐた。客室にはブルエンヌも居合したが彼女の態度は前とは餘程違つて居た。マリヤとニコライの話は極めて簡單な無意味なものであつた。マリヤはつとめてアンドレエーの話を避けてゐた。

マリヤは忌中なので、交際社會には少しも出なかつた、ニコライも訪

問を見合して居たが、此處の知事夫人が二人の縁を結ばうと頻りに肝煎してゐた。

ボロディノーの戰報、續いてモスコウ滅亡の怖しい悲しい報知がボロネズに着いたのは九月の末であつた。マリヤは兄の負傷を公報で知つた、たゞ負傷したと丈で何等の確報もないので兄を探がしに行かうと決心した。

ニコライは此の悲報に接して快々として樂まず、急いで聯隊へ歸る可く出發の準備をした。出發の數日以前、寺院で戰勝祈禱の莊嚴な禮拜が行はれた。ニコライもそれに加つた。知事夫人から注意されて見やるとマリヤも來て居た。マリヤの許へ行つて「アンドレエー公爵は聯隊長ですから萬一の事があればすぐ公報に出ますよ。決して御心配なさるには及ばないと思ひます。」と云ふと、マリヤは「本當に怖ろしい……。」と云つた丈で、感動のあまり口も利けぬといふ風、唯眼で感謝する丈であつた。ニコライはそのマリヤの樣子から今迄にない深い印象を受けた。宿舍に歸つても青ざめた柔和な悲しげな顏、光つてゐる眼、殊に全身を包んで居る深い悲しみの色が、深く彼を動かした。

「嗚呼、本當に天使だ。自分はなぜ早まつてソンニャと約束して了つたのだらう？」などゝ後悔しながら二人を比較して見る。ソンニャは愛すべきも神々しいマリヤには及ぶ可くもない。「あゝ、ソンニャから離れて自由を得たい。お母さんが云はれた事は本當だ。ソンニャと結婚するのは不幸を購ふやうなものだ。」と思ふ、しかし亦、ソンニャを思うては怖ろしい迷から覺める事が出來る樣に。」とも祈つた。此時二通の手紙が届いた。母からと、ソンニャからとである。先づソンニャのを開(あ)けて二三行讀んで見て眞青になつた。やがて喜びと驚きとで

眼を瞬つた。手紙には斯う書いてあつた。「私は御恩になつて居る御家族の不幸を增す種となるのは心苦しう御座います、何卒私の事はお忘れ下さいませ……たゞソンニヤは何人よりも深く貴君樣を思うて居るといふ事を、知つて下されば誠に嬉しう御座います……。」

此手紙によつて益々、彼とマリヤとは接近した。

五十二

ピエルと一緒に閉ぢ込められて居る者は皆下級人民であつたが、彼等はピエルを憎んで忌み嫌うた。漸く二十日を經て第二回の審問があつた。ナポレオンの參謀と思はれる士官が手に捕虜名簿を持つて來て嚴重に訊いた末、ピエルを或る將軍の前に連れて行つた。將軍はピエルを見て「私は此男を知つて居る。」と冷やかな口調で云つた、ピエルは全身水を浴びた樣に慄然として、「閣下、御承知の筈は御座いません、私は今迄御會ひ申した事は御座いません——。」將軍は他の將官を顧みて「此は露國の間諜だ。」といふ。「いや違ひます。」とピエルは早口に辨解した。其の日は多數の捕虜が死刑にされた、併し、如何いふ譯かピエルの刑は延期されて、捕虜收容所へ移される事になり、彼は暗い所に閉ぢ籠められた。其處には多くの捕虜が居た。隣にゐた男がピエルに「嘸、おつらいでせう。」と問ひかけた。其の同情ある優しい聲を聞くと自ら涙が眼に浮んだ。其の男は悔む事はないですよと言葉を繼いで露西亞の婦人の話す樣な、小鳥の歌の樣な柔しい言葉附で「苦しむのは一時で生きるのは一代です。私達が罪もなくて此處に住むといふのも難有い事ぢやありませんか。」などと云つて、包の中から馬鈴薯を出して與へた。ピエルは今日一日何も喰べなかつたので、非常に喜んだ。如何云ふ譯で此處へ連れて來られたかと其の男が聞くので、ピエルは

委しく答へて、「貴君は？」と問ひ返すと、「私？前の日曜からです、モスコウの病院からでした。」「そんなら軍人ですなあ。」「アプシエロン聯隊に居りました。熱病で死にさうでしてな――。だがそんな事はどうでも宜い。」と云つて少しも悲しむ様子は見えない。「此處は寂しいでせう」とピエルが聞くと「そんな事があるものですか。」と答へて、「私はカラタエフと申します。」と云ひ添へ、これからの交際を望んだりなどして、「……モスコウは町々の母とさへ云はれます。決してモスコウが亡んで仕舞ふやうなことはありませんよ。屹度又芽を出します。虫は甘藍を嚙むが、甘藍の前で死ぬと古い諺にもあります。」といふ。「それはどういふ意味ですか、私には判りません。」とピエルが云ふと、その意味を説明して「私の知識から出たのではありません。全く神の御心です。」と云ひ、財産はあるか、家はあるか、妻はあるか、両親はあるかと夫れから夫れへと問ひかける。暗くて見えぬが、此等の問を發する時には唇を曲げて親しげな笑を浮かべて居る事が想像される。カラタエフは此度は「お子供はお有りですか……」と聞いたが無いと答へると失望したらしい様子で、「貴君は未だお若いのですね、此から生れますよ。――何事も諦めて暮すに限ります、乞食の嚢からと牢屋の室からとはどうしても逃げる事が出來ませんからね。」など云つて、さて、他の山で薪を盗んだ爲に裁判にかけられて、長い兵役を課せられた身の上話を長々と語つて後、「到底運命の手は避けられませんよ……人はよく不平を云ひますが、人間の幸福は曳網の中の水見た様な物で、曳けば空になる、置いておけば一ぱいになつて居る。幸福を求めようとするのは愚な事ですよ。」と笑ひながら云つた。暫くしてからカラタエフは祈禱をして眠りに入つたが、ピエルは中々寝られない。

戸外には喧しい聲が聞えるが此處は靜かで暗い。

ピエルは二十三人の兵士と共にもう四週間も此の室に閉ぢ込められてゐる。思ひ出づる事一つとして悲しからぬはないが、カラタエフの談話に善良な眞の露西亞氣質が偲ばれて、力强い、貴い聯想が頭にのこつた。朝になつてカラタエフを見ると、佛蘭西流の外套に繩帶をした身體が丸々して居る。その談話の樣子から推察するともう五十歲を超えてゐるやうだが自分でも確かな年齡を知らぬらしい。白い奇麗な齒は一本も拔けて居ず髮も髯もまだ白髮を交へず無邪氣な顏が若々しく、聲は小鳥の聲の樣に滑かである。格別何に秀でゝ居ると云ふではないが一通りは何でも出來る、云はゞ八百屋で、麵麭も燒けば、料理もする、縫物もすれば散髮もやり、靴直しもやるといふ風だ。日中は一生懸命に仕事をして夜になると樂しげに語り與ずる。がピエルが聞き直

すと、自分も何を云つたか忘れて了つて出鱈目に話す。併し云ふ事には往々哲理が含まれてゐた。カラタエフと一緒に居る事はピエルには非常に修養になつた。

五十三

マリヤはニコライから兄がヤロスラヴルのロストフ家に居る事を聞いて、直に甥を連れて伯爵家を尋ねて行つた。伯爵に會つて、いろ〳〵禮を云ふと、伯爵は多くを語らず、姪ソンニヤを紹介したりなどした。ナタシヤはマリヤが來たと聞いて急いで會ひに來た。マリヤは一眼見て、ナタシヤの側へ行つて唯泣く計りである。ナタシヤの目は明らかに言葉以上の深い意味を語つて居るが、マリヤは是非言葉で聞きたい。「傷は如何で御座いますか。あの兄の容體は？」「今貴女が御覽になればお分りになりますが……。」と暫く躊躇して後言葉を續けて、醫者

は治るといふが、傷が化膿して、ひどく熱が出て來たので――と云って涙に咽んだ。「瘠せたでせうねえ。」とマリヤが問ふと「お瘠せになりました。マリヤさん、到底ももう好くはおなりになりますまい、とてももう――それは。」

マリヤはナタシヤと病室へ行つて見ると、蒼白めて窶れ果てた兄はしげ〳〵と二人のやうすを眺めた。マリヤはその兄の眼から「お前は生きてゐる。而して未來の事を考へて居る、けれど私は……。」と云つて居る樣に思はれた。軈て、「機嫌はよいか、如何して來た?」と兄は尋ねた。懶げな細い聲だ。マリヤにはそれが聲張り上げて泣かれるのよりも悲しかつた。「兄さん御容體は?」と聞くと「醫者に……醫者にお聞き。」とやつとこれ丈云つて、暫くしてからニコラシュカを伴れて來たかと訊ねる。子供を連れて來て會はす、子供は彼を見て別に泣きも驚きもしない。父は唯接吻した丈で何も云はない、子供が連れ出された後で、マリヤは泣いてゐると、アンドレエーは譫言のやうに「マリヤ、新約全書を……。」「何で御座いますか。」「いや何も、此處で泣くな――。」

アンドレエーは既に死に瀕してゐる事を自ら知つて居る。彼は眠つては覺め、覺めては眠つて、今更に生の長きに驚いて居る。ナタシヤもマリヤも枕元に茫然と坐つて、靜かに、渠が深く〳〵沈んで、安らかに二人から別れて(何處かへ)行くのを待つより外はないのだ。やがて、人々は臨終の別れを告げに來た。子供を連れて來ると、父は最後の接吻をしてすぐ向き直つた。身體には最後の痙攣が靜かに來た――魂が身體から拔け出る樣に、やがて、身體が動かなくなる、二三分經つと冷たくなり始める。マリヤは「あゝ、もう。」と叫んだ。ナタシヤは

寢床の傍へ寄つて、「何處へ行つてお了ひなすつたんだらう？あゝ、もう今は何處にいらつしやるんだらう？」と云つて嘆いた。身體を洗ひ清めて卓上の棺に收める時、皆永遠の別を告げて涙を濺いだ……皆各々別樣の意味の涙を——。

五十四

原因結果の關係は、到底人智のよく了解し得るものではないが、すべて原因を究めんとするのは人の天性だ。一現象には相關聯する無數の原因が伴ひ其の何れもが最大の原因の樣に見える。人は其中最も明らかなものを捕へて來て、「此が原因だ」と叫ぶのだ。

歴史上の事實の原因を知らうと思へば、群集の行動を導いた英雄の意志のみならず、絶えず英雄を鞭撻して行く群衆の活動を究はめねばならぬ。或はその何より說明するも同じいと云ふが、たとへばナポレ

オン軍の東歐侵入を以て、ナポレオンの自由意志によるとなす者と、西歐羅巴の群集の活動から必然に起つたのだとなす者との間には、地球は固定して遊星が動くとなす者と、地球と遊星と共に動く法則があるとなす者との相違ほどの相違があるのだ。

ボロディノーの戰及びモスコウ占領後の一八一二年の役で、最も著しいものはマルガ街道を通つてリアザンからタルチノーの陣營に向つた露軍の行進だとは歴史家の云ふ所である。此の「側面運動」は露西亞を救ひナポレオンを覆したもので、總司令官の巧みなる作戰に出づるものと敵も味方も思つて居るが、果してさうであつたらうか。若しこれに他の條件はなかつたならば、露軍は却て致命傷を得たであらうと思ふ。

はじめ露軍は侵入軍に追擊されて一直線に退却したが、追擊の止むのを見て方向を變へ軍用品供給に便利な方へ轉じたのが即ち側面運動で此の有名な側面運動は單にかうした理由から行はれたのに過ぎない。だが露軍に優秀な司令官が無かつたならば半圓を描いてモスコウに歸つたかも知れない。こゝにクツゾフの偉い所があるので、ボロディノーの戰爭に於て露軍の勝利を豫言したのも彼だ。彼の豫言通り野獸はボロディノーで傷き、而して獵師は逃げた。其野獸——佛軍——は突然叫び聲をあげた。その叫びは困迷擾亂を示すものであつた——といふのは、ナポレオンが和議をクツゾフの營に申込んで來たのだ。時は十月二十日、ナポレオンは親書をクツゾフに齎したが、彼は斷乎として妥協を排し、全力を盡して最善を盡さうと決心したのである。是より前皇帝の親書がクツゾフに屆いた。彼の責任は非常に重い。

クツゾフは情報によつて佛軍の左翼に何等の防禦もない事を知り、攻勢に轉ずるの有利なるを見るや、直に敵軍攻擊の命令を發した。

ヲルロフ伯爵はコサック騎兵の一隊を率ゐて、其夜即ち十七日の夜有利なる地點を占領した。其翌日早朝波蘭の一下士がやつて來て、其處から一バストの距離に於てミュレイ將軍が露營して居る。百人の兵があれば彼を捕虜にするのは易々たる事だと告げた。會議の結果全員總攻擊と決し、先づゲルコフ少將にコサック騎兵二個聯隊を授けてその下士も共に出發させる事とした。

ヲルロフは下士に向つて「若し貴樣の言ふ事が虛言であつたら犬の樣に首を締めるぞ。本當であつたら百デュカットやる。」と云つた。下士は返答せず覺悟の色を浮べてゲルコフの一隊と共に出發した。一隊はすぐ森の中に隱れた。

ブルロフは敵兵の陣營を望み見た。非常に優勢らしいので、思はず「しまつた！」と叫んだ。さてはあの下士は間諜であつたか？と彼は無念の拳を握つて直ぐに「呼び返せ」と副官に命じる。ゲルコフはひき返した。が、ヲルロフは又考へ直して攻撃と決心し低い聲で命令を與へた。

「ウラア、〳〵！」と云ふ喊聲と共に森影から現はれたコサック騎兵の一隊が手に手に槍を振り翳して疾風の如く敵營に亂れかゝつた。不意を擊たれた敵兵は、慌てふためき、武器も馬も打捨てゝ右往左往に逃げ散つた。コサック兵が何の顧慮する處なく、驀地に追擊したならば、ミュレイ將軍も其參謀も捕虜にする事が容易だつたらう。無數の戰利品の外捕虜千五百人と註せられた。

既に大軍を率ゐてモスコウに入つた以上は勝利は勿論ナポレオンのものである。若し彼が軍隊の掠奪を戒むる事、防寒の用意をする事、糧食の準備をする事の此の三箇條を守つたならば勝算歴々たるものである。然るに事實はこれに反した。ナポレオンは兵士を統御する上に於ては天才中の天才と迄云はれるが、此時は掠奪を恣にせしめて顧みなかつた。すべて、今迄の彼とは思へぬ程優柔不斷であつた。

話は前にかへるが、所謂露國の遊擊隊は佛軍がスモレンスクに到着した時に始めて組織せられ、次第に發達して、十月頃には種々雜多のものを合はすと數百隊にも上つた。デニゾフとドロコフも今は遊擊隊長の一人となつて、熱心に佛兵掃蕩に從事して居る。

ピチヤもデニソフの遊擊隊に加つて居る。兩親に別れて歸隊したピ

チャには、軍隊の中の見るもの聞くものが皆嬉しかつた。早く實戰に臨みたいと待ち構へてゐたところ、十一月二日、誰か一人をクツゾフの遊擊隊に送る事になつたので、自ら進んで其の任に當らん事を請うた。

或る夜デニソフの隊へドロコフが來た。デニソフはドロコフに輜重隊攻擊の爲めに聯合隊を作つて居る事、ピチャが使に來た要件、明日の戰爭、佛軍の護衛兵などについて話した。ドロコフは「難有う、併し正確に敵兵の數を知らんと何もならん。戰線に入つて偵察して見たい、誰か行く人はないかなあ。」と獨語の樣に云ふと傍に聞いてゐた、ピチャは「私――私が行きます。」と云つた。デニソフは止めたが、如何しても行きたいと云つて、此度はドロコフに向つて、是非連れて行く事にして吳れと賴んだ。遂に承諾させられて、ドロコフはピチャと共に佛兵の服に身をやつして馬へ騎つて出掛けた。眞暗な中を並木から森を

過ぎて、危險を冒して佛軍の陣營近く忍び入り、仔細に偵察して歸つて來た。而してピチャはドロコフと別れる時にその腕を取つて「貴君は實に英雄だ。」と云つて賞めた。デニソフは心配して入口に立つてピチャの歸りを待つて居たが、ピチャが恙なく歸つたのを見ると、喜んで「神樣の御蔭だ！」と叫んだ。ピチャが愉快だつたといふと、ドロコフは「僕は君の爲めに一睡もしないで居たのに。」と冗談半分に不平を云ふ。「朝迄一寸寢よう」と云ふと、ピチャは「私は寢ると中々起きられませんから、起きて居ませう。」と云つてデニソフが寢たのを見て戸外へ出た。不思議な幻影が見えたり、今迄に聞いた事の無い樣な管弦樂が聞えたりする。うつとり夢見る心持である。目を閉ぢると又節面白い歌が聞える――。

翌早朝、デニソフは小屋の側に立つて、命令を與へて居た、ピチャの

事など忘れて居る樣だ。一寸ピチャを見て今日は常にない嚴格な調子で、「私の命令を奉じて、よく任務を盡す樣に。」と云つた。二人は馬を並べて進軍の途に就いたが互に何一つ言はず默つてゐる。夜は次第に明け放れたが、遠方は朝霧に包まれて居る。坂を下りた時、デニソフは側なるコサック兵を顧つて、「信號！」と叫んだ。

コサック兵が手を上げると小銃の音がした。同時に馬蹄の響がして方々から叫聲が聞える。ピチャはデニソフが呼びとめるのも顧みず、手綱を緩め、馬腹を蹴つて、驀地に突進する。俄かに佛兵と思ぼしい五六人が眼前に現れたと思ふと、其一人はピチャの馬蹄の下に泥の中へ倒れる。ピチャは銃聲の間を驀進する、硝煙の中に朧ろにドロコフを認めたが顧みもせず、歩兵隊を見ては「萬歳！」などと叫び乍ら無二無三に進んで行く中、流彈に腦を擊たれて落馬した。遠方から此樣を見たデニソフは「殺られた！」と叫んで、とんで來て馬から飛び降り、顫える手でピチャを抱き起して見ると顏はもう眞青になつて血と泥とで汚れて居る——。

デニソフとドロコフとは此襲擊に因つて敵を追ひ拂ひ味方の捕虜を救ひ出した。其中にはピエルも居た。

五十六

佛軍がモスコウを退却し始めたのは十月の十八日で、ピエルの居る捕虜團も一緒に連れて行かれた。カラタエフは又た熱病にかゝつて、その側へ寄ると、烈しい身體の臭氣がするので、ピエルは成丈近寄らぬ樣にして居る。ピエルは牢獄に居る中に、眞實の幸福とは何んなものかといふ事は、理窟でなく實際に於て悟る事が出來たが、今此の行

進中の三週間に更に新らしい眞理を悟り得た。――それは、「世界に何も怖ろしいものはない、人の幸福と絶對の自由とに反對するものは一つもない。人は元來不幸なものでもなく、又不自由なものでもない。苦惱にも極限があり、自由にも極限がある。而して此二つの極限は甚だ相近いものである……。」

十一月三日、一行は或る地點に止まる事となつた、ピエルは密かに外へ出て降りつゞく雨の泥濘の中を歩き乍らいつものやうに雨を厭なものだと思ふ。彼は今何も考へて居ない樣に見えるが、心の底では前夜カラタエフが話した事に就いて思ひめぐらしてゐるのである。

昨夜眞夜中にカラタエフに逢ひに行くと、稍々熱もひいて頗る元氣で種々の話をした。昔、或善良な商人が友達と順禮旅行をしたが、其友達が宿屋で何者にか殺された。ところが血のついた小刀が自分の枕

の下から發見されたので、其商人は殺人犯と認められて或る鑛山へ苦役にやられた。商人は寧ろ死なして呉れる樣にと神に祈つて居る。或る時其の懲役人等が集まつて、各々自分の罪狀を語り合つた、その商人は寃罪の一伍一什を物語つて、(私は何一つ惡い事をした覺えはありませんが、いえ不平は申しませんけれど――私には子供も妻もありません――。)と云つた。すると熱心に聞いて居た一人の囚人が突然「それは俺だ。許して呉れ!」と叫んだ。其の商人は(神樣はお前さんをお許しになるでせう、我々は皆神の前では罪人であります。)と云つて烈しく泣いた。後で其の眞の犯人は自首して出たので皇帝から此商人へお許(ゆる)しの書付が下つたが其時は――とカラタエフはこゝ迄云つて唇を震はして、神樣はもう其商人を許して居られた、其の商人は死んで居たのだ――と語つて、「世の中は此樣(こんな)ものですよ。」と云つた。而して嚴肅な微

笑を顔に浮べたのである。

或る朝カラタエフが見えぬので、探して居ると、彼は少し離れた處の樺の木に凭れてゐた。ピエルを見た其の眼には涙が浮かんで居た。そして其日彼は佛兵に銃殺された。ピエルは其人の語り遺した商人の話を思ひ出さずには居られなかつた。

遊撃隊の襲撃によつてピエルが救はれたのは其翌朝であつたのである。ピエルが救ひ出された時、デニソフはピチャの死體がコサック兵の手によつて堀たての墓穴に運ばれるのを悲しさうに眺めて居た。

ナポレオンの退却——寧ろ敗走——も、これから餘り久しい後の事ではなかつた。

五十七

たとへ何でもない動物などでも其死に行く樣を見るのは怖ろしい。まして眼前に、骨肉や戀人の死を見て、どうして心を傷けられずに居られようぞ。

アンドレエーの死によつてナタシャもマリヤも苦い經驗を味つた。マリヤは伯爵家を別れゆく淋しさに堪へぬけれども、何時迄もそこにとゞまる譯には行かない。其處でマリヤはナタシャも一緒にモスコウへ行く事を許して呉れるやうにと伯爵夫人に請うた。

伯爵夫妻は快く承諾したが、本人のナタシャは何處へも行き度く無いと云ふ。ナタシャは此頃はあまりの悲みに心も亂れて、眼に一ぱい涙を溜めて、「彼の人は今何處にいらつしやるんだらう、今どうして居らつしやるのだらう？」などとあらぬ事を口走る。そこへまた、ロストフ家は悲しい不幸に見舞はれた。伯爵はピチャ戰死の悲報を聞いて子

供の様に泣いた。夫人は危く卒倒しようとして僅かにソンニャと下女とに助けられた。ナタシャがその部屋へ入ると、夫人は、「ナタシャ――偽だ。……殺された？……は……は……は……そんな事は偽だ。」と狂氣の様に、「お前は正直だ、本當の事をお聞かし。」と云ふ。聽て少しは落着いたが、それでも、「あゝ善く歸へつて來た、疲れたであらう。」とか、「おゝ立派におなりだこと！」などと繰返す。「阿母さんは何をおつしやるの？」とナタシャは聞くと、「ナタシャ、ピチャは死んだんだよ――死んで了つたんだよ。」と云つて始めて泣いた。

ナタシャはそれから三週間母の側につき切つて氣の紛れる樣な話をしたりなどして、落着かせようとしたが、その深い悲みにやぶれた傷は癒ゆ可くもない。ピチャの死は彼女の半生を奪ひ去つて了つた。一ケ月程の後には、まるで前とは變つて仕舞つて、半ば死んだものゝやうに、急に年寄じみて來た。

アンドレエーの死によつて親しくされたナタシャとマリヤとの仲は此の新らしい不幸によつて一層密接になつた。マリヤは出發を延ばして三週間の間ナタシャを慰さめ、病兒の樣に大事にした。今は二人互に相愛する樣になつた。二人の話題はいつも幼き日の追憶であつた。アンドレエーの話はつとめて避けた、此は痛ましい記憶をつき動かして、舊傷を刳る樣なものであるから。――其の中に自然と忘れて行くであらう――勿論二人はさうは思はないであらうが。

ナタシャの心の傷は案外早く癒えたけれど、其後どうも健康が思はしくないので、翌年二月の始めマリヤがモスコウに立つ時に、マリヤをも同伴して名醫の診察を受けさせるやうにと、伯爵夫人はナタシャに話した。

クッゾフ元帥は戰勝の光榮を荷つて歸つた。皇帝はジョオジ勳章勳一等を授けて其の功を賞し其の勞を犒らひ給うた。併し政治上には皇帝の御親任が無かつた、といふのは誠に當然の事で、元帥に戰爭以外の事を求めるのは無理なのだ。一言に評せば元帥は既に時勢遲れである。歐洲の現狀、各國勢力の均衡などについては、元帥は何等の理解もなかつた。軍事行動の終はつた今日、一介の武辨には既に露國に貢獻する何物もなかつた。その中に元帥は死んで了つた。

五十八

救ひ放たれたピエルはアーヨルからすぐキエフに出發しようとしてゐたところ、俄かに病氣になつて三箇月の間アーヨルに留まる事になつた。醫者は種々な療治を加へたが些とも癒らない。腦裡には怖ろしい幾多の印象が斷片的に幽かに明滅する。雨の日の惱み、雪の日の苦み、足や横腹の痛み、不幸な人の物語りなどが、それからそれへととりとめもなく思ひ出される。

放たれた其日、ピエルはピチャの死骸を見た。又同じ日にアンドレエーかボロディノー戰後一ヶ月で死んだ事、妻のエレンか死んだ事などをデニソフから聞いた。しかし、それ等は皆自分に無關係の事の樣に思はれて、唯早く人を殺し合ふ處から遁れて靜かな隱家を求め度いと思つてゐた。

病褥の上に横つてゐても、時々未だ捕虜になつて居るやうな氣がする。而して我に歸つて自由の身である事を知つて、云ふに云はれぬ喜悅を感ずる。今は心も輕く、自由になつたやうに思はれて嬉しい。心に何等の障碍もない、と云ふのは信仰を得たからだ。其信仰は、規則

とか、信條とか、獨斷とかではなく、生活の信仰、神を知る信仰だ。到る處で神を見る事が出來るのだ。殊に獄中でカラタエフに於て見た神は莊嚴な無限なものであつた。此迄彼の心を惱ました恐ろしい疑問——「何故か？」といふ問は全く心から消えた。あらゆる疑念は、簡單な答によつて打消される。「神があるからだ」といふ簡單な答へで。——ピエルはこれ迄すぐ熱して調子外れになつて、滔々と喋つたが今は靜かに他の言葉を聞くのを喜ぶやうになつた。アーヨルの醫者は人の命を預つてゐる時間の甚だ貴重な事は知つて居たが、ピエルと話をする事を喜んで數時間を費す事もあつた。醫者の紹介で會ひに來た伊太利人の士官も非常に感動して「露國に貴君の樣な人計りがあれば戰爭などは起らないのに。」と云つた。

ピエルがモスコウに着いたのは翌年の二月の始めであつた。知人に逢つて、マリヤがモスコウに居る事も、アンドレエーの死んだ事も委しく知る事が出來た。アンドレエーとボロディノーで最後の會見をした時の有樣が力强く胸に浮んだ。

ピエルは直にマリヤを訪ねた。瘠せて蒼白めて前とは見違へるやうになつたナタシヤを見ては、樂しい追憶が胸に漲つた。マリヤはナタシヤがモスコウへ來た譯を委しく話した。ピエルは二女と共に未來の多い青年の死を悲んで、慰める言葉も知らなかつた。マリヤはこんな變轉の激しい世に活きるには信仰がなくては堪へられぬと云ふと、ピエルは同感に堪へぬと云ふ樣子で「眞實にさうです。」と云つた。ナタシヤが、それを「何故で御座いませう？」と聞いたので、マリヤは寧ろ呆れた。ピエルは詳しく其心持を說明して聞かした。食堂へ入つて後も二女は種々の問を發して熱心にピエルの話を聞いて居た。ナタシ

ヤは非常に感動して居た。

ピエルが歸つた後、二女は寢室に入つて、ピエルの話を題目として種々と語り合つたが、ピエル其人に就いては何方も云ひ出さなかつた。ナタシヤは長々アンドレエーの話をしなかつた、今日は少し話しませうと顔を赤くして云ふと、マリヤは如何とつたのか、「ピエルさんにですか。ほんとうにあの人は立派な方だわ。」と云ふ。「本當にさうよ。」と云つてナタシヤは久振の笑顔を見せた。「湯上りの樣に奇麗で生々としてゐらしつたわねえ。」「亡くなつた兄もピエルさんと一番仲よしでしたのよ。」とマリヤは答へた。

其の翌晩、ピエルはマリヤに晩餐に招かれた。其時ピエルはナタシヤに自分がナタシヤを思うてゐるといふ事を告げ、明後日頃彼得堡へ行くが、歸つて來たら結婚するつもりだと述べた。マリヤは今は其時機

でないと考へて、唯斯う云つた。「何事も私にお任し下さいまし、私は。」

ピエルの心は、丁度曾てエレンと婚約を結んだ時の樣に喜びの波を擧げてゐる。

ナタシヤは正直に感情を表白して、少しも飾つたり隱したりしなかつた。今は悲哀の影もなく、愉快さうであつた。

ピエルとマリヤと話した夜、マリヤが居間に歸るとナタシヤは闕の處で待つて居て、「彼人何と云ひましたの？」と聞いた。マリヤにはナタシヤの考が善くわかつた。兄の事や、兄がナタシヤを愛して居た事などが心に浮んだ。マリヤは悲しげな、嚴肅な顔をして、ピエルの云つた事は皆ナタシヤに話した。

ナタシヤはピエルが彼得堡へ行くといふのを聞いて非常に驚いた。「彼得堡へ？」と繰り返して「私如何したらよいでせう……。」と泣き

聲になつた。マリヤが、「貴女、彼人を愛して居るの？」と問ふと、「はい！」とナタシヤは囁いた。

「貴女はどうしてお泣きなさるの、私は喜んで居るのに。」「すぐにはいかないでせうけれど、私が彼人の處へ行き、貴女がニコライと結婚なすつたら、本當に幸福ですけれど」「ナタシヤさん！そんな事もう澤山ですわ、獨りでおつしやい……。」

二女は默つて居た。「けれども、なぜ、彼人は彼得堡へ行かなけりやならないんでせう。」とナタシヤは急に叫んだが、心の中で自分の問に答へた。「えゝ、えゝ、それが一番宜いでせう——マリヤさん、其が一番宜いでせう……」

——戰爭と平和了——

大正三年七月廿三日印刷
大正三年七月廿八日發行

發行者　佐藤義亮　牛込區矢來町三番地中の丸五十八號

發行所　東京市牛込區矢來町中の丸　新潮社　電話(番町)二二三番　振替(東京)一七二二番

印刷者　東京麹町區飯田町二丁目五十番地　(秀光舍)佐々木俊一

西洋大著物語叢書第二編
—定價五拾錢—

◎近代名著文庫

▼近代文藝の代表的傑作の飜譯也
▼毎編總洋布製體裁極めて華麗也

飜譯書類

第一編	死の勝利	ダンヌンツイオ作 生田長江氏譯	▼定價金壹圓四拾錢 ▼郵送料拾貳錢
第二編	サフオ	ドオデエ作 武林夢想庵氏譯	▼定價金九拾五錢 ▼郵送料八錢
第三編	遊蕩兒	オスカアワイルド作 本間久雄氏譯	▼定價金壹圓貳拾錢 ▼郵送料拾貳錢
第四編	煙（スモオク）	ツルゲーネフ作 大貫晶川氏譯	▼定價金壹圓 ▼郵送料八錢
第五編	サアニン	アルチバアセフ作 中島清氏譯	▼定價金壹圓六拾錢 ▼郵送料拾貳錢
第六編	虐げられし人々	ドストエフスキー作 昇曙夢氏譯	▼定價金貳圓貳拾錢 ▼郵送料拾貳錢
第七編	鄕愁（守備兵の話）	ピエール・ロチ作 後藤末雄氏譯	▼定價金壹圓 ▼郵送料八錢

飜譯書類

- ■トルストイ　復活（脚本）　島村抱月氏脚色　▼▼定價金七拾錢　▼郵送料八錢
- ■スチヴンソン　寶島　押川春浪氏譯　▼▼（上下二冊）五拾八錢宛　▼郵税八錢宛
- ■オスカアワイルド　獄中記　本間久雄氏譯　▼▼定價金四拾五錢　▼郵送料四錢
- ■オスカアワイルド　警句集　生方敏郎氏譯　▼▼定價金四拾錢　▼郵送料四錢
- ■露國新作家集　毒の園　昇曙夢氏譯　▼▼定價金九拾錢　▼郵送料八錢
- ■ツルゲーネフ　散文詩　草野柴二氏譯　▼▼定價金參拾五錢　▼郵送料四錢
- ■チエホフ　櫻の園　瀨沼夏葉女史譯　▼▼定價金六拾錢　▼郵送料六錢
- ■イプセン　鴨（脚本）　森田草平氏譯　▼▼定價金六拾錢　▼郵送料六錢

飜譯書類

- ■ツアラトウストラ　ニイチエ著　生田長江氏譯　▼▼定價金貳圓參拾錢　▼小包料金拾貳錢
- ■表象派の文學運動　アーサーシモンズ著　岩野泡鳴氏譯　▼▼定價金壹圓　▼小包料金八錢
- ■子の見たる父トルストイ　イリヤトルストイ著　播磨猶吉氏譯　▼▼定價金八拾五錢　▼郵送料金八錢
- ■少女の操（エヴンゼリン）　ロングフエロー著　高須梅溪氏譯　▼▼定價金參拾錢　▼郵送料金四錢
- ■泰西思想家文豪の警句集　女と惡魔　魯庵・秋聲氏等序　安成二郎氏譯　▼▼定價金四拾錢　▼郵送料金四錢

評論書類

- ■懷疑と沈默の傍より　島村抱月氏著　▼▼定價金七拾錢　▼郵送料金六錢
- ■自我生活と文學　相馬御風氏著　▼▼定價金九拾錢　▼郵送料金八錢
- ■黎明期の文學　相馬御風氏著　▼▼定價金八拾五錢　▼小包料金八錢

小說書類

綠陰叢書第一編	破戒	島崎藤村氏作 ▼定價金八拾錢 ▼郵送料金八錢
綠陰叢書第二編	春	島崎藤村氏作 ▼定價金九拾錢 ▼郵送料金八錢
綠陰叢書第三編	家	島崎藤村氏作 ▼(上下)七拾五錢宛 ▼(二册)郵稅八錢宛
綠陰叢書第四編	微風	嶋崎藤村氏作 ▼定價金七拾五錢 ▼郵送料金八錢
	黴	德田秋聲氏作 ▼定價金五拾五錢 ▼郵送料金六錢
	爛	德田秋聲氏作 ▼定價金五拾錢 ▼郵送料金六錢
	足迹	德田秋聲氏作 ▼定價金五拾五錢 ▼郵送料金六錢
	廢墟	小川未明氏作 ▼定價金七拾五錢 ▼郵送料金八錢

340
46

終